

各方面からの参加者を

第1回実行委員会ひらく

第14回和歌山・人権啓発研究会第1回実行委員会が9月25日、和歌山人権研究所でひらかれ、企業者はじめ実行委員会メンバー17人が参加した。

第14回和歌山・人権啓発研究会開催要項

- 場所 プラザホープ 4F
ビッグ愛 12F
- 日時 2014年1月28日(火)10時~17時
- 参加費 4000円
- 内容
 - 10:00 開会
 - 10:30 全体講演
「絵本で子どもたちを元気に!」
講師 長谷川義史(絵本作家)
 - 12:00 休憩
 - 13:00 報告活動
「紀の国被害者支援センターのとりくみ」
浅利武(事務局長)
 - 14:00 分科会
第1分科会
「戸籍と差別」
報告 大川一夫(弁護士)
報告 部落解放同盟和歌山県連合会
司会 小笠原正仁
 - 第2分科会
「識字と人権」
報告 大賀喜子(大阪市立大学人権問題研究センター)
報告 吉本拓司(岩橋識字学級指導者)
報告 山本はつ美(善明寺識字学級)
報告 楠見知代美(善明寺識字学級)
コーディネーター 高石順弘(和歌山県教育委員会)

はじめに、野口道彦・研究所理事長から「不正取得事件があいつぐなか、レンタル店などで、身分証明のために運転免許証のコピーを取られる場面が多くあると思う。そんなとき、私の個人情報だからコピーの必要はないとはつきり言わなければならぬ。すべての人の個人情報が必要がある」とあいさつがあった。次に、研究所の事務局から、昨年の参加実績にもとづく各市町村・諸団体への要請数、大会趣旨、講演内容、などが説明され、メンバー全員の拍手で決定した。

●参加を希望される方は、和歌山人権研究所まで
TEL 073(474)4400

和歌山県による「人権課題現況調査」結果から5年が経過する。明らかにされた部落の実態は「生活の格差は、相対的に縮小しているように見えるが、仕事は相変わらず不安定であり、土木建設業に従事している比率が高く、従業上の地位では技能生産単純工の位置にあり、収入は不安定な現状にある。また、部落産業といわれた「皮革」「織物」業は衰退し、非常に厳しい実態にある。生活実態をみると高齢世帯を中心に「無年金」の現状が多くみられる。教育をみると、高校の

主張 原点である 大衆運動にかえろう

進学率で「格差」はちぢまっているが、学力が十分定着していない現状があり、大学の進学率にはまだまだ大きな格差が存在している」として、課題解決のための

実態把握のとりくみが必要である。県下の部落の実態は改善されたのか。生活は、仕事は、教育は、差別事件は、など「部落白書」づくり(実

態を明らかにするとりくみ)を早急に実施しなければならぬ。部落解放運動の拠点支部であり、そこに結集する部落大衆である。解放運動は、水平社結成当時から

部落大衆とともに歩みを進め、部落差別の撤廃にとりくんできている。部落大衆の要求を組織し、行政闘争を展開してきた。大衆のもっている要求は「差別の結果」から出てきており、その要求の実現が、差別解消の一步として闘われてきた。繰り返してし提案している各支部での活動の中心は「世話役活動」であり「相談活動」である。



ある精肉店のはなし

2012年3月。代々使用してきた屠畜場が102年の歴史に幕を下ろした。最後の屠畜を終え、北出精肉店も新たな日々を重ねていく。いのちを食べて人は生きる。「生」の本質を見続けたきた家族の記録。(チラシより)

映画 「ある精肉店のはなし」が完成しました!

肉と肉、いのちのち

大阪貝塚市での屠畜見学会。牛のいのちと全身全霊で向き合うある精肉店との出会いから、この映画は始まった。家族4人の息の合った手わざで牛が捌かれていく。牛と人の体温が混ざり合う屠場は、熱気に満ちていた。店に持ちかえられた枝肉は、丁寧に切り分けられ、店頭並ぶ。皮は丹念になめされ、立派なだんじり太鼓へと姿を変えていく。家では家族4世代が食卓に集い、いつもにぎやかだ。家業を継ぎ7代目となる兄弟の心にあるのは被差別部落ゆえのいわれなき差別を受けてきた父の姿。差別のない社会にしたいと、地域の仲間とともに部落解放運動に参加するなかで、いつしか自分たちの意識も変化し、地域や家族も変わっていった。

狭山事件を 考えよう



小学生の頃から子ども会には参加していたもの、部落も差別も、子ども会の意味もわからず、まして、狭山事件のことなど知らずのうちに遊んでいた少年どもも少なくない。時代は時代で変わった。高校生になり「狭山事件」のことを子ども会活動のなかで学習し「差別は今も存在し、差別に苦しむ人がいるのだ」とはじめて感じた記憶があります。

それから、狭山事件を更に学ぶ機会を得て、狭山中央集会上に平井支部から参加するようにになりました。当時は大型バスで、婦人部の方が作ってくれたおにぎりをやおでんを積み込んで和歌山から東京までを移動したのですが、座席は補助席まで満席で身動きが取れず、腰は痛いし眠ることもできないし大変だったのを思い出します。

でも、会場の日比谷公園に到着してあまりの参加者の多さとその熱気に「すごい!」以外の言葉が出てこないほどびっくりしました。集会で石川一雄さんの

石川一雄さんの真の自由を願うことはもちろん、我々自身の誇りのためにも「石川無実」を勝ち取るよう願ってやみません。(松井辰也)

文化の窓

「沖縄ワジワジー通信」

著者:金平茂紀
ISBN 978-4-8228-1374-1

98年にはじまった「沖縄タイムス」の連載記事をまとめ、若干の字句修正した一冊。ヤマトンチューの筆者が沖縄からみた日本をワジワジー(腹立たしい)しながら記したもの。日本は、弱い立場に米軍基地、下北半島や若狭湾の原発を押し付け、福島第1原発で起きた悲惨な事故にですら、早期解決にむけた施策を打ってこなかった。この本は筆者が「そろそろ気づけ」と警鐘をならしているように思う。



問い合わせ 県連・教宣部まで
TEL 073-473-2301